
タイ政治における黄シャツと赤シャツ： 誰、なぜ、どこへ

玉田 芳史

第1節 狂乱144

第2節 黄シャツと赤シャツ145

第3節 虐殺の後150

第1節 狂乱

タイでは黄シャツをまとった群衆と赤シャツをまとった群衆が権力闘争を繰り広げている⁽¹⁾。先制したのは、ジャーナリストのソンティが主導して2005年から集会やデモを始めた黄シャツである。狙いは01年発足のタックシン政権打倒であった。黄シャツは06年にPAD（民主主義のための国民連合）を結成して参加者を増やし、首相への退陣圧力を強めた。首相が下院の解散総選挙で応じると、PADは野党とともに4月の総選挙をボイコットし、裁判所による総選挙無効判決を5月に引き出した。9月には軍隊によるクーデタが起きて、政権打倒の目的を達成した。この反タックシン派は、タックシン復活の芽を摘むため、与党TRT（タイラックタイ党）の解党、TRT幹部111名の5年間休職（政界追放）、タックシンの資産凍結、新憲法の起草といった措置を講じた。脱民主化努力に反発する人々は、07年にUDD（反独裁民主戦線）を結成し赤シャツを着用して政治運動を始めた。民政復帰のために07年12月に実施された総選挙で、タックシン派のPPP（TRTの後継政党）が第一党になって政権を握ると、クーデタ後鳴りを潜めていたPADが08年に街頭運動を再開した。PADは政権打倒を目指して、5月に路上集会を始め、8月には首相府を占拠し、さらに11月には首都の空の玄関を2つとも占拠した。空港封鎖で大混乱に陥る中、裁判所が与党に解党判決を下して首相を失職させ、PADへの掃討作戦を頑なに拒んでいた軍首脳がすかさず議員に働きかけて野党民主党への政権交代を実現した⁽²⁾。PAD、裁判所、軍隊の見事な連携プレーであった。民意に反する政権の誕生に激怒するUDDは09年4月に、総選挙実施を求めて大規模集会を首都で開き、政権の非民主性を訴えようと会場に押しかけASEAN首脳会議を中止に追い込んだ。軍隊は自らが作った政権を守るべく出動し、UDDのデモ隊を蹴散らした。UDDは10年3月にも再び総選挙の早期実施を求めて、首都の官庁街と繁華街で路上集会を開いた。政府側は実質的には陸軍司令部に等しい非常事態対策本部(CRES)が主導して4月10日と5月19日の二度にわたって強制排除のために重装備の軍隊を投入し、91名の死者、2000名を超える負傷者を出した。

多数の大衆が、しかも長期にわたって政治闘争に参加し続けるのはタイ史上初のことである。場外乱闘型の政治が長期化し日常化した理由はいくつもあろう。第1に、公道での無許可のデモや集会を禁止する法律が2005年に下院で可決成立していたものの、違憲訴訟が起こされ、憲法裁判所は06年5月に違憲判断を下した。国民は、暴力沙汰を起こさない限り、路上デモを行う自由を享受した。第2に、タイには、デモ隊に死傷者が出ると、国王が介入して政権が崩壊するという先例があった。1973年と92年である。76年の虐殺は、国王の介入ではなく、クーデタによる政権交代につながった。過去の教訓ゆえに、一方でPADやUDDには流血で国王の介入を招こうと目論む分子がおり、他方で政府も警察

や軍隊も取締りを戻込みした。第3に、この権力闘争は、過去の事例に照らし合わせると2006年クーデタでけりがつくはずであった。そうならなかったのは、対立の当事者が、エリートだけにとどまらず、大衆へも拡大したからである。PADもUDDもともに、何十日にもわたって集会を続け、多いときには10万人を超える参加者を集めていた。双方とも集会の様子をテレビで24時間生中継しており、全国のお茶の間からの応援団(視聴者)は街頭よりも多かった⁽³⁾。

王党派の黄シャツと反発する赤シャツは誰なのか、倦むことなく参加するのはなぜなのか。一般的には、黄シャツは裕福で高学歴の都市中間層、赤シャツは貧困で低学歴の下層民(農村部住民と都市下層民)と説明されることが多い。都市部と農村部、あるいは中間層以上と下層の対立というわけである。PADによれば、赤シャツはタックシンへの隷従者であった。それが正しければ、親玉のタックシンを、06年にクーデタ、07年に資産凍結処分とTRT解党判決、08年に利益相反禁止規定違反判決、10年に資産没収判決といった具合に、いくら叩いても勝利が訪れないのはなぜなのか?また、民主党政権は、民心をタックシンから離反させるべく、赤字国債の発行により、タックシン政権を上回る利益再配分政策に力を入れている。しかし、その加速ぶりを見るにつけ、金品で赤シャツを「改心」させることは容易ではなさそうに思われる。

黄シャツにしても赤シャツにしても、多数の人々が政治運動に長期にわたって危険を顧みず参加するのは、参加したいという自発的な意志があるからであろう。本稿では、先行研究に依拠しながら、黄シャツと赤シャツが誰なのか、なぜ権力闘争に参加するのか、2010年の徹底弾圧後の赤シャツはどこへ向かおうとしているのかといったことについて考えてみたい。

第2節 黄シャツと赤シャツ

(1) 背景としての社会経済と政治の変化

PADとUDDの政治闘争を、社会経済構造の変化に関連づけて体系的な説明を初めて試みたのは歴史家のニティである。彼の議論の要旨は次の2点である。第一に、過去20~30年間の経済社会の変化によって、農村部に中間層が登場した。都市中間層よりも下に位置づけられる下位中間層である。第二に、農村部中間層は社会全体では多数派を構成しており、その支持を受けた政党が政権を担当するようになった。その結果、都市中間層の政治力は低下して、農村部住民と対等になった⁽⁴⁾。

重要なのは農村部の変化である。都市部住民は農村部について好対照な偏見を抱いてい

る。1つは、貧しく無知な人々というイメージである。教育の拡大やテレビの普及といった変化のおかげで政治状況に関する情報や理解は都市部でも農村部でも大差がなくなっていることを無視して、悪い政治家に買収され騙され、政治に参加するに値しない人々と決めつける。これと正反対なのは、2010年現在テレビで放送されている麗しの農村である。国王提唱の「足を知る経済」哲学に則った農村のイメージである。何十年も前の想像図を今日の状況であるかのように描き出した小農社会である。現実からかけ離れたこの理想郷では、農民は自立して幸せに暮らしており、政治に頓着する必要がない。政治に参加する資格がない必要がない、そのいずれにしても排除される農村部住民からすればもってのほかである。彼らは、市場経済に慣れ親しみ、小規模な投資を行うので、政策や政治に無関心ではいられない。

しかも、社会経済面のみならず、1990年代以後は政治が大きく変化した。1つは国政の民主化である。92年に91年憲法の部分修正が行われ、首相は民選議員から選ばれることになった。首相の人選では、国王や軍隊の意向ではなく、選挙の結果がもっとも重要になった。このため、97年憲法の起草では史上初めて選挙制度が最大の焦点になった。ここでは、不安定な連立政権を生み出すそれまでの中選挙区制に代えて、小選挙区400名、比例代表100名という新しい選挙制度が導入された。新制度による初の総選挙が01年に実施されると、具体的で野心的な政権公約を掲げる政党が登場し、勝利をおさめた。タックスン率いるTRTである。国政に加えて、90年代以後には地方分権が進んだ。選挙の機会は、それまでの下院議員と自治体議員の2回から、上下両院議員、県会議員、県自治体首長、市町村議会議員、市町村首長の6回へと急増した。再選を目指す政治家は有権者の意向に沿おうとする結果、有権者は選挙によって政策が変化することを学習した。選挙は政策の選択へと確実に変化した⁽⁵⁾。国政で公約の多くを実現したTRTとその継承政党が、05、06、07年の総選挙で続けて第一党になったのが何よりの証拠である。

中間層と上層の中には、社会経済の変化を直視できないばかりではなく、少数派であるがゆえに民主化によって敗者となったことに納得できないものが少なくない。自分たちは、田舎者よりも物知りで、道徳で優れていると自惚れ、そして田舎者は、間拔けで、無学で、政治家に騙されていると決め込んでいる⁽⁶⁾。2010年9月にチューラーロンコーン大学で開かれたセミナーで、UDDの活動家は、「下層の巨人が目覚めると、中間層や上層はタックスンの仕業であると解釈した。下層は、不平を漏らしたことがないので、民主主義を理解していないと見なされてきた。赤シャツの運動をタックスンの差し金と捉えるのは、国民の政治意識の変化を理解していない証拠である」と述べた⁽⁷⁾。そうした自己美化や他者誹謗は、無知に由来する過失ではなく、熟知の上で選挙に由来する正当性を否定しようとする確信犯的な行為であろう。

(2) ニティの所説

ニティはUDDについて興味深い指摘をしている。第一に、UDDはタイの歴史上最大規模の大衆運動である。規模でPADを遙かに凌駕している。第二に、UDDは一枚岩にまとまっているわけではなく、多様な勢力の寄せ集めである。第三に、UDDは方向、目的、規模、組織、指導部がたえず変化し続けている。赤シャツの最大部分は下位中間層であり、最貧層ではない。下位中間層の太宗を占める農村部中間層は、小農であることを止めて、市場向けの生産を行っているので、政策の決定に関与したいと願っている。そうした機会は選挙しかないにもかかわらず、選挙の結果がたびたび無視されている。このことに怒るUDDは必ずしもタックシンの支持者ばかりではなく、彼に批判的なものや、彼に関心の乏しいものも含まれている⁽⁸⁾。

ニティは黄シャツについても考察している。黄シャツには都市中間層が多い。彼らの不満は、経済、政治、文化に見いだせる。黄シャツは、総じて、赤シャツよりも裕福である。しかしながら、経済面では、企業の利益のうち給与として配分される割合の低下、製造業部門の給与水準の低下、大企業への利益集中、農産物価格支持政策による消費者への負担転嫁といった変化への不満がある。政治面では、民主化にともない多数決主義が優先されるようになると、政治への発言力が低下した。タックシン政権による所得再配分政策の恩恵が下層に偏ったことへの不満もある。このため、都市中間層は旧来の政治体制に既得権益を持つあらゆる勢力と同盟した。それは軍隊、王党派、司法、一部の資本家や実業家、官僚である。文化面では生活の安定が脅かされることへの不満がある。中間層は現状の安定を確保しつつ、社会的な地位の上昇を願っている。ところが現実には、上昇は困難であり、むしろ下層が上昇して中間層に参入してくるという事態に直面している。彼らはこうした変化に不安を覚え、昔ながらの身分社会に郷愁を感じる一方、変化の象徴であるタックシンを毛嫌いしている⁽⁹⁾。

(3) アピチャートらの農村部調査

経済学者のアピチャートらは、首都に隣接するナコーンパトム県、北部のチェンマイ県、東北のウボンラーチャターニー県で赤シャツや黄シャツに関する農村部調査を行っており、2010年6月に中間報告を行った⁽¹⁰⁾。そのうちナコーンパトムでのアンケート調査の結果は、標本数が99とはいえ⁽¹¹⁾、黄シャツと赤シャツの違いを浮き彫りにしており興味深いので、かいつまんで紹介したい。

調査地の住民には黄シャツと赤シャツのほか、いずれも支持しないという中立派もいる。これら3つのグループについて、学歴を調べると、大卒以上は黄シャツが38.5%、赤シャ

ツが18.7%、中立派が17.1%であった。職業について調べると、農業は黄シャツが35%、赤シャツが53%、中立派が66%、公務員は黄シャツが35%、赤シャツが22%、中立派が15%であった。社会保険のない不安定な被雇用労働は黄シャツが4%、赤シャツが9%、中立派が2%であった。また、月収は黄シャツが31,427(副業を合計すると41,973)パーツ (1パーツ≒0.36円)、赤シャツが17,034(18,215)パーツ、中立派が11,955(13,323)パーツであった。ここから黄シャツは赤シャツと比べると、職業が安定し、学歴が高く、収入が多いことが分かる。他方、赤シャツは「貧しく低学歴の農民」というステレオタイプ化したイメージとは異なり、最貧層ではなく、必ずしも農業に従事しているわけでも学歴が低いわけでもないことが分かる⁽¹²⁾。アピチャートらは調査結果を要約して、「赤シャツは、所得の面で、中の下の階層（新中間層）である。都市部でも農村部でも、貧民ではなく、市場メカニズムと密接に結びついた経済生活を送っている。」さらに「赤シャツに共通する重要な特色は、生活の不安定である」とまとめている⁽¹³⁾。

アピチャートらは、社会学的な属性に加えて、意識も調査している。3グループとも貧困と感じているものは少数派であり、中流意識を抱くものが半数に達している。しかし、興味深いのは貧富の格差を容認しうるかどうかである。大半のものが現状を容認しているものの、黄シャツは容認派が57.7%と少なかった⁽¹⁴⁾(表1参照)。職業が安定し、所得も多い黄シャツが、不満をもっとも強く感じているということである。この不満は、ニティが指摘する変化への不安と同じではないかと想像される。

表1 自己認識

	貧しい	普通	貧富差甘受
黄色	26.9%	61.5%	57.7%
赤色	28.1%	50.0%	75.0%
中立	17.1%	78.1%	87.8%

出所 Aphichat et al., 2010, pp.40-41.

デモや集会(請願を含む)への参加経験は中立派が32%ともっとも多く、赤シャツもほぼ同数の31%である。他方、黄シャツは8%にすぎない。選挙で欠かさず投票しているものの割合は、赤シャツ>中立派>黄シャツの順であり、選挙運動(集票活動)を手伝った経験も赤シャツ>中立派>黄シャツの順であった(表2参照)。2006年クーデタへの姿勢を問うと、黄シャツは80.0%が肯定しており、赤シャツの12.5%、中立派の7.3%と著しい対照を示している(表3参照)。今後起きるクーデタへの賛否については、理由を問わず断固反対が、赤シャツは56.3%、中立派は58.4%であるのに対して、黄シャツは15.4%にとどまっている。容認しうる理由を尋ねると、「王室防衛のため」は、黄シャツ73.1%に対して、

赤シャツ28.1%、中立派26.8%である。「政治混乱解決のため」は、黄シャツは57.7%、赤シャツ31.2%、中立派29.3%である⁽¹⁵⁾(表4参照)。ここから、黄シャツは、赤シャツや中立派に比べて、民主政治への関与や拘りが乏しいことが明らかである。

表2 過去5年間の政治参加経験 [%]

	赤シャツ	黄シャツ	中立派
デモや集会への参加	31	8	32
選挙運動の手伝い	19	8	10
いつも投票(国政)	97	88	90
いつも投票(地方政治)	88	73	82

出所 Aphichat et al., 2010, p.58.

表3 2006年9月19日クーデタへの賛否 [%]

	赤シャツ	黄シャツ	中立派
賛成	12.5	80.0	7.3
反対	81.3	19.2	43.9
その他	6.3	30.8	48.8

出所 Aphichat et al., 2010, p.58.

表4 今後起きるクーデタを支持するかどうか [%]

	赤シャツ	黄シャツ	中立派
王室防衛	28.1	73.1	26.8
政治混乱解決	31.3	57.7	29.3
汚職対策	28.1	46.2	19.5
タックシンの帰国	18.8	0	2.4
絶対反対	56.3	15.4	58.4

出所 Aphichat et al., 2010, p.59.

アピチャートらの調査結果を要約しよう。赤シャツが運動に参加する理由は、1つはタックシンへの恩義である。赤シャツは「ポピュリズム政策の恩恵に与ったものや、タックシンとTRTを支持する人々」である⁽¹⁶⁾。第2は、二重基準と表現される政治的社会的不公平への憤りである。「赤シャツは、軍隊によるタックシン政権の崩壊、憲法裁判所による [PPPの] サマック政権とソムチャーイ政権の崩壊を通じて⁽¹⁷⁾、多数派の支援は政権の成立や維持にとって決定的な要因とはならないのだと痛感させられた。それは多数派である赤シャツの選挙権の否定に等しい⁽¹⁸⁾。」2010年の運動で国会の解散と総選挙を要求したのは、投票そのものではなく、「経済的社会的文化的な差違を超えた政治的平等を求めた」のである⁽¹⁹⁾。

(4) チェンマイ大学の調査チーム

チェンマイ大学の人類学者が2010年7月から北部地方の複数の地点で行っている共同調査の中間発表を同年8月末に行った。リーダーのピンケーオによると、北部地方でのUDDの「集会への参加者の半分以上は中間層であり、雇用主、官僚、教員である。」「赤シャツはあらゆる集団や経済階層に存在し、階級を横断している。」学歴についても、「集会参加者の半分以上は大卒以上である⁽²⁰⁾。」

もう1人の研究者ノンヤオは、赤シャツが多数を占める北部であえて黄シャツを探し出して調査を行っている。分断や対立が生じたのは、2005年から06年にかけての時期である。ソンティのタックシン批判に賛成し共鳴する人々は黄シャツになった。他方、批判が一方的すぎて公平ではないと感じる人々は赤シャツになった。黄シャツを自認するのは、選挙政治への拘りがなく、タックシンを毛嫌いし、クーデタを肯定する人々である。赤シャツの方も多様であるが、タックシンへの恩義派、クーデタに反対する理想派、二重基準への憤懣派の3つに分けられる。恩義派は生活が改善されたことに感謝している。家族の福利に責任を負う主婦は、政治に関心がなかったものたちも、恩恵を実感してこぞってTRTの支持者になった。そうした思いがことのほか強いのが理想派であり、2010年にはバンコクへ馳せ参じたものが多い⁽²¹⁾。

第3節 虐殺の後

(1) 首都の正常化

民主党政権は2010年4月から5月にかけての赤シャツ掃討作戦で甚大な人的被害を出した。国民はこのことを不問に付しているわけではない。たとえば、タイで最大の発行部数を誇る大衆紙タイ・ラットに連載される一コマ漫画を見てみよう。シアの筆名を用いる人物が作者である。アピシット首相は常連の登場人物である。首相就任の原動力となった造反議員を意味するコブラの襟巻き、操っている黒幕の手、この2つがいつもつきものである。2010年には時期に応じて3つの表情で明瞭に描き分けられてきた。最初は当人に似たかわいい青年である。3月に赤シャツの集会が始まる直前から陸軍第11歩兵連隊に籠もったので、3月27日のマンガには、国会解散を要求する赤シャツを前にして、「軍靴に隠れて恥じない」という見出しがついている(図1参照)。

4月10日に強制排除作戦決行で死者を出すと、表情はヒトラーに似せられるようになった。この表情は1ヶ月あまり続くことになる。4月14日掲載のマンガでは、血塗られた手の首相が、マス・メディアの取材を受けている。ジャーナリストはいずれも目隠しを

しており、赤シャツの犠牲者に目を向けようとはしていない(図2参照)。「正義は振り返って見よ」という見出しがついている。

図1 強攻策前のアビシット首相



出所 : Thai Rat (online), 27 March 2010

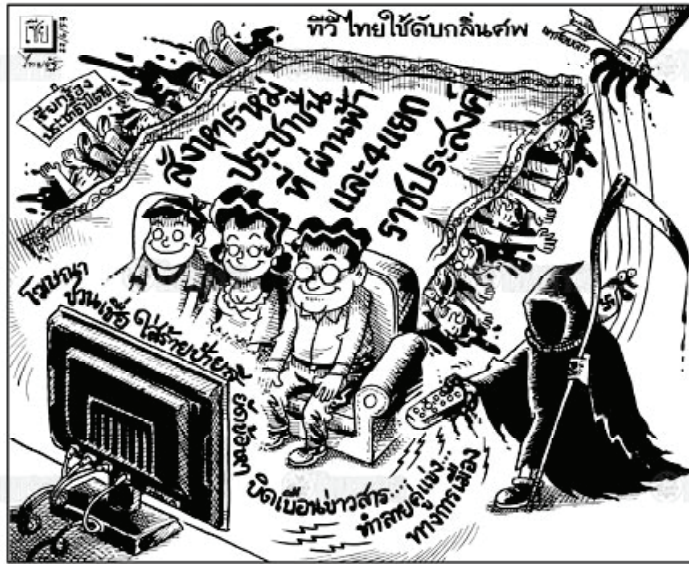
図2 ヒトラー似のアビシット首相、4月10日以後



出所 : Thai Rat (online), 14 April 2010

5月19日に強制排除が執行され、再び多数の死者を出すと、アピシット首相は死に神として描かれるようになった。もはや顔はない。6月22日掲載のマンガでは、誘導されるままに、虚偽やねつ造の報道に無表情に見入り、犠牲者を忘れていた視聴者が描かれている。「死臭を消すのに使われるテレビ」という見出しがついている(図3参照)。

図3 死に神のアピシット首相：5月19日以後



出所：Thai Rat (online), 22 June 2010

5月19日以後、少なくとも2010年の年末まで、アピシットはたえず死に神として描かれ続けている。黒衣には、国民殺害を命じた、とロゴのように書き込まれることが多い。売り上げ増に熱心な全国紙で、辛らつきわまりない姿が用いられ続けるのは、共鳴ないし支持する読者が多いからであろう。

ところが、バンコクの住民は、100名近い人命が失われたことに政府が責任を負うべきとは考えていないようである。10年7月29日にバンコクで実施された下院議員の補欠選挙で、民主党の候補者は9.6万票を獲得し、PTP（TRTの孫世代後継政党）の公認を得て獄中から立候補したUDD幹部に1.5万票の差をつけて当選した。その1ヶ月後の8月29日には都議会と区議会の議員選挙が実施された⁽²²⁾。政権与党であり、都知事の与党でもある民主党は、都議会の61議席中45議席（PTPが15、無所属1）、区議会の256議席中210議席（PTPが39、無所属が7）と勝利をおさめた。民主党は議席を増やしたわけではない⁽²³⁾。また、都知事が2代にわたって民主党なので、与党化傾向の強い地方議会で民主党議員が増えるのは自然なことである。これら2点を考慮にいれてもなお、あたかも何もなかったかのように、都民は与党への支持を撤回していないということは重要であろう。

これはなぜであろうか。

2010年5月19日には首都と地方で多くの放火事件が起きた。とりわけ、東南アジア有数の商業施設セントラル・ワールド (CW)の放火は、建築をめぐる政治文化を研究するチャートリーによれば、「タイの中間層のもっとも大切な文化的象徴を破壊するに等しかった⁽²⁴⁾。」赤シャツの仕業であるとすれば、「首都の中間層の態度に対する怒りの表明であった。」首都中間層は選挙を「尊重するには及ばないと公言して憚らず⁽²⁵⁾、」2010年の「4月と5月に路上で生じた武力行使や殺人に対して見て見ぬふりをした。」首都中間層のこうした態度が「集会参加者やUDD支持者の間に失望、無念、怨念を感じさせるのは避けがたい⁽²⁶⁾。」もう1つ、赤シャツ以外の勢力が放火したという可能性もある。赤シャツに対する怒りを増幅して、「首都中間層が放火以前からすでに政府に交付していた殺人許可証の有効期限を延長する効果があり、鎮圧をより激しくより徹底させることができた⁽²⁷⁾。」

5月19日の掃討作戦直後に無償の奉仕活動として行われた虐殺現場の大掃除を、人類学者のムックホームは、「赤シャツが再び登場して汚さないように根絶やしにしようとする」首都の中間層による「殺人後の殺菌」作業とみなす。彼女によると、背後にあるのは差別である。「首都でも地方でも、中間層と同じような商品を購入し、同じようなサービスを利用する“庶民”が増えている。」都市の中間層は、庶民が上昇して近づいてくることを嫌い、階層の違いをことさらに強調する。彼らは、政治面でも、「道徳や教育がすぐれた少数者が支配すべきと考えている。」ここから、大掃除は、庶民が中間層の隊列に加わろうとするのを阻止しようとする企てと解しうることになる。

バンコクは騒動からほどなくして何もなかったかのように正常化した。ムックホームによれば、これは、「まともな外国人には理解しがたい」ことに、内外向けの重要産業の1つであるかのように事実の「忘却、歪曲、捏造」が行われているからである⁽²⁸⁾。これは中間層の独りよがりではなく、民主党政権や主要マス・メディアとの共同作業の産物である。別の研究者プワントーンは、メディアの偏向を厳しく批判する。2010年4月10日の強制排除作戦では政府側の被害者はほぼ4分の1であった。ところが、翌日4月11日の英字紙バンコク・ポストの一面を飾ったのは、負傷した兵士の写真であった。彼女によると、すべての掲載写真を数え上げてみても、兵士のほうが多かった。あたかも政府側の人的被害のほうが大きいような報道がなされていたのである。これはほかの新聞にも共通しており、政府の統制が厳しいテレビはいうまでもなかった⁽²⁹⁾。歴史家のトンチャイも「タイのマス・メディアは、実のところ、首都住民の、首都住民による、首都住民のためのメディアである。」「近年の偏向は、非常に大きく、露骨であり、度を越している。それは、首都の中間層や上層の考え方を反映しており、さらに首都の中間層や上層に影響を与えている⁽³⁰⁾。」

(2) 今後の展望

赤シャツが繁華街で集会を続けるさなかの2010年5月3日に、アピシット首相はテレビの特別番組に出演し、5項目からなる講和案を示し、事態が正常化すれば11月に総選挙を実施すると提案した。5項目は王室奉戴、差別解消、報道自制、4月以後の死傷事件の真相究明、政治家への規制や処分の見直しであった。このうち当事者である赤シャツに直接宛てたのは2点目の差別解消のみである。「対立を解消するための改革は、政治に関わっていると思われるかもしれない。しかし、対立は経済的な不公平から生じているのである。」「国民は職業、所得、生活の安定の面で福祉を享受すべき時代となった。著しく困窮している国民は体系的に面倒を見てもらわねばならない⁽³¹⁾。」首相はこのように、赤シャツの不満の最大の原因が経済的な差別つまり貧困にあると述べていた。施しやバラマキによって貧困を緩和してやろうというのである。しかし、アピチャートらの調査が強調するように、赤シャツの不満の主因は貧困ではない。彼らは最貧層ではなく、困窮しているわけではないからである。貧困が原因とすれば、経済面ではなく、社会や政治の面での貧困であった。法の前の平等や普通平等選挙権の尊重といった平等原則が踏みにじられることである。政府側は争点を誤解もしくは歪曲しており、それゆえに対立を緩和しえない。対立がこじれ長期化するほど、政治への感覚を研ぎ澄ます国民が増えて、UDDの勢力拡大につながっている。

UDDは5月19日以後にテロリストの容疑をかけられて逮捕投獄されたり国外に逃亡したりしたものが少なくない。しかし、UDDは勢力が衰えたとは必ずしもいえない。政府は2010年4月に出した非常事態宣言を首都と近隣3県のみでは12月下旬まで解除しなかった。赤シャツの人数や密度が多い東北地方や北部地方ではなく、首都圏で5名以上の政治集会禁止や軍隊による治安維持といった措置を続けたのはやや奇異である。その理由は政府が行う厳しい言論統制から推察しうる。政府は数多くのウェブサイトへのアクセスを禁止している。用いられているのは、2007年コンピュータ犯罪法と刑法112条（不敬罪規定）である。政府が安全保障の名の元に守ろうとしているのは主として王室である⁽³²⁾。しかし同時に、民主党政権やPADは、反撃困難という意味での万能兵器の王室を、政敵の弾圧に用いてもいる。今日の非勤王という烙印はかつて冷戦時代の共産主義と同様な効果を付与されており⁽³³⁾、身に覚えのないものの間では反王室感情をかえってかき立てている。

厳しい規制ゆえに、王室への批判がマス・メディアを通じて表に出てくることはごく稀である。しかし、政府や軍隊の首脳の発言からは、王室批判への強い懸念が想像される。そうした批判の片鱗を窺わせる事例をいくつか紹介しよう。オーストラリア国立大学の大陸部東南アジア研究者のウェブサイト「ニュー・マンダラ」で2010年11月中旬にシンガ

ボールの新聞の記事が転載された。赤シャツは5月の取締り以後、反王室感情を強めており、9割が反王室になったという内容であった。多くの読者から書き込みが行われ、その1人タムマサート大学の左派教員として高名なソムサックは、「赤シャツの大衆の間における反王室感情は、3月の集会以前にはあまり高かったとはいえないだろう。微かに仄かにあったにすぎない。しかし今では、[5月の掃討から]数ヶ月のうちに・・・[原文のまま]。これは前代未聞である。(1976年)“10月6日 [の虐殺事件]”後でも今ほどの水準には達していなかった」と記している。虐殺から6ヶ月目の11月19日の追悼集会を観察に出かけた人物は、9割は多すぎるが、5割ならありうる、という赤シャツ活動家の言を紹介している。同じ人物は数日後に再び書き込みをして、国王と国民は父子ということになっているが、この父は子のために喧伝されるほどのことをしてくれるわけではないので、子にとどまるのはご免だというバンコクのタクシー運転手の発言を紹介した。ソムサックはそれに反応して、「多数のタクシー運転手が見ず知らずの乗客に対して、王室について明け透けに語るのは驚くべきことである。これは非常に重要である。タイでは誰もがそれがきわめて危険だと分かっている。それでもタクシー運転手は躊躇わないのだ。なぜこんなことになっているのだろうか。私が思うに、草の根で赤シャツに共感する多くの人々の口には出せない鬱憤を反映しているのであろう。ここ数年の政治危機における王室の役割に対するわだかまりである⁽³⁴⁾。」これは、2006年からの権力闘争では王室が当事者ではないかと疑っているものが少なからずおり、10年5月以後は王室へ不満や怒りを抱く人々が急増していることを示している。

反王室感情は、前述のチェンマイ大学の研究者の調査でも裏付けられている。それによれば、人々をUDDに誘うのは「衰微」である。第1は経済の衰微である。タックシン政権時代よりも景気が悪くなっている。第2は司法の衰微である。黄シャツは何をしても咎められず、赤シャツは何かをすれば違法とされて刑務所に放り込まれるという「二重基準」への不満である。第3は、「かつて人民を保護していた伝統的な制度 [=王室] に対する信頼の衰微」である。「どこで調査しても、誰もが口にする。」すなわち、王室への信頼の低下が遍く観察されるというのである⁽³⁵⁾。このことはほかの研究者によっても確認されている⁽³⁶⁾。

王党派がPADを使ってタックシンに挑むことで始まった戦いは、王党派とUDDの戦いへと変化してきた。王党派は、タックシンへの責任転嫁をしきりと繰り返している。しかし、チェンマイ大学の研究者が、「赤シャツには古いものも新しいものも5月19日以後のものもいる。赤シャツに加わる理由は増える一方である。調査から分かったところによると、集会に参加する理由は、当初の二重基準や不公平への不満から政治体制への不満へと拡大している。」これらの要因は、「しばしば指摘されるTRTやタックシンへの支持より

も重要である」と指摘するように⁽³⁷⁾、UDDはタックシンを越えて広がりつつある。タックシンは09年にはUDD集会の積極的な煽動者であったが、10年には妥協的な姿勢を集会参加者から批判された。UDDは最大の票田となっており、タックシンを含めた政治家はそのUDDを意のままに操ることができないため、支持をつなぎ止めることに躍起になっている⁽³⁸⁾。タックシンは、庶民の目には過剰と思われるほど政敵から叩かれることによって、二重基準を確証するのに好都合な民主主義のための殉教者の1人になりつつあるのかもしれない。王党派はそのタックシンを叩くために、民主政治を否定してきた。選挙結果の否定は国民主権の否定に等しく、それを繰り返せば、選挙への利害関心を強めており、しかも選挙以外に有効な政治参加手段を持たない庶民の反発を招くのは当然である。敵はタックシンではなく、民衆である⁽³⁹⁾。庶民を敵に回した戦いでは勝算は乏しい。

UDDは5月19日以後、政権や黒幕のみならず、首都の中間層にも批判を向けている。主流派マス・メディアの論調に同調する中間層が、選挙で勝てない政権を支えているからである。国民は長引く権力闘争を通じて政治を関知し理解する能力を格段に高めているように思われる。5月19日以後のタイでは「目がさえる」もしくは「覚醒する」という意味の言葉(ta sawang)が人口に膾炙している。分かってしまったと考えるものが増えつつある。ニティによれば、「赤シャツは経済や社会の変化の産物なので、武力を使っても、この運動を解体することはできない。この変化に適応するように、政治体制を変えるしか打開策はない⁽⁴⁰⁾。」それゆえ、変化を拒むほどに、二重基準や不公平が明瞭になり、王室を危険にさらすことになろう。というのも、王室は存在感が誰の目にも日増しに鮮やかになりつつあるからである。UDDが2010年12月10日の憲法記念日に首都で集会を予定すると、首都警察の幹部は前夜に「CRESの規則に従う限り、集会や活動は可能である。無事に終えるために心がけるべきことは、集会で用いるポスターや看板に王室を侵す内容を書かないことである」と警告した⁽⁴¹⁾。治安担当者が懸念するのは暴力ではなく、王室批判なのである⁽⁴²⁾。

注

- (1) 2005年以後の権力闘争を的確に解説したものに、柴田直治『バンコク燃ゆ：タックシンと「タイ式」民主主義』めこん、2010年がある。
- (2) 権力闘争における軍隊の役割については、拙稿「クーデタとその後：タイ陸軍の人事異動と政治介入」『国際情勢紀要』80号(2010年)、151-183頁を参照。
- (3) 先鞭をつけたのはPADのASTVであり、UDDは当初はD Station、後にPTVである。いずれもパラボラ・アンテナを準備すれば無料で受信可能であり、ケーブル・テレビやインターネットでも配信された。

- (4) Nithi Iosiwong, “Kanprap rabop kanmunag(1)(2)(3)”, Matichon (online), 25 August, 1 Sept, 8 Sept, 2010.
- (5) 「地方の有権者が票を売り、それゆえ国政では何の意味もなかった時代には、票の売買を気にかけるものはいなかった。しかし、有権者が賢くなったからこそ、歯止めをかけなければならなくなった。票の売買や恩顧政治について騒ぎ立てるのは、選挙民主主義が順調に機能するようになったので傷をつけてやろうと試みているにすぎない。」 Chang Noi, “The facts about vote-buying and the patronage system,” The Nation (online), Sept 1, 2008.
- (6) Thongchai Winitcakun, “Fun talop lang mi khon thuk khatai trong ratchaprasong”, *An*, 2(4)(Apr - Sep 2010): 55-56.
- (7) “Raingan sewana: ‘kanmuang bon thong thanon khong khon thammada’ mong phan waenlai si”, <http://www.prachatai3.info/journal/2010/09/30968>, 5 Sept 2010.
- (8) Nithi Iosiwong, “Kanmuang khong sua daeng”, Matichon (online), 26 April 2010. また、Nithi Iosiwong, “Lom wong khao ma: khui kap ‘Nithi Iosiwong’ nai wan ‘sua daeng’ phai”, <http://www.prachatai3.info/journal/2010/06/29994>, 16 June 2010も参照。
- (9) Nithi Iosiwong, “Sua luang pen khrai lae ok ma thammai”, Matichon (online), 12 July 2010.
- (10) 調査の基本的前提は、ニティを踏襲しており、社会経済の変化によって、農村に中間層と呼びうる階層が成長してきたというところにある。調査チームの一員となっている人類学者のユクティは中位中間層を「旧中間層」、下位中間層を「新中間層」と呼んでいる。“Yukti Mukdawicit’ poetchomna ‘chonnabot mai’ khon yotya phu toentua caopho mai sua luang lae sua daeng”, Matichon (online), 21 July 2010. なお、筆者は2010年8月29日にアピチャート氏と会って意見交換した。彼によると、調査は進行中であり、予備報告書では100ほどの標本しか使っていないので結果を過大視しないで欲しいとのことであった。
- (11) Aphichat Sathitniramai, “Khrai khu sua daeng lae sua su phua sing dai”, Prachachat Thurakit (online), 28 June 2010.
- (12) Aphichat Sathitniramai, Niti Phawakkhrapan, Yukti Mukdawicit, Praphat Pintoptaeng, Narumon Thapcumphon, and Wannawiphang Manachotiphong, *Rang raingan buangton khrongkan wicai kanplianplaeng dan setthakit lae sangkhom khong chonnabot mai*, 15 June 2010, pp. 34-38.
- (13) Aphichat et al., p. 38
- (14) Aphichat et al., pp. 40-41.
- (15) Aphichat et al., chapter 5. UDDは選挙民主主義の復活、PADはUDDとタックシン派の徹底弾圧、狙う方向が正反対なことはいうまでもなからう。
- (16) Aphichat et al., p.23.
- (17) 憲法裁判所は、2008年9月に料理番組出演が利益相反禁止規定違反と認定してサマックを失職させ、同年12月にはPPP解党判決でソムチャーイの下院議員資格を喪失させて失職させた。
- (18) Aphichat et al., p.25.
- (19) Aphichat et al., p.27
- (20) “Prachatham: Mong kanmuang luang-daeng nai mum sangkhomwitthaya (1)”, <http://www.prachatai.com/journal/2010/09/31013>, 8 Sept 2010.
- (21) “Prachatham: Mong kanmuang luang-daeng nai mum sangkhomwitthaya (2)”, <http://www.prachatai.com/journal/2010/09/31076>, 14 Sept 2010.
- (22) 投票率は前回なみに41~42%程度と低い。
- (23) 2007年総選挙では民主党27議席、PPP (PTPの前身) 9議席であった。07年都議会議員選挙は民主党40、PPP20であったものの、後に5名がPPPから民主党に移籍した結果、選挙前の議席は当選議席数と同一であった。他方、区議会については2006年に民主党は203議席であった。Bangkok Pundit, “What do the Bangkok local election results mean?”, <http://us.asiancorrespondent.com/bangkok-pundit-blog/what-does-the-result-of-the-bangkok-local-elections-mean>, Aug 31, 2010.
- (24) Chatri Prakitnonthakan, “Central World: Naiya thang kanmuang to khon chan klang Krungthep”, *An*, 2(4): 107.
- (25) Chatri, *An*, 2(4): 108.
- (26) Chatri, *An*, 2(4): 110.

- (27) Chatri, *An*, 2(4): 112. なお、赤シャツは2010年12月に、5月19日にCW内部で撮影されたという写真を多数公開し、放火が政府側の仕業であると主張した。12月4日に70枚ほどの写真がウェブサイトで公表された。http://www.internetfreedom.us/thread-4211.html?utm_source=twitterfeed&utm_medium=twitter&utm_campaign=Feed%3A+IFreedom. CRESは写真に写っている武装した兵士は5月19日より前に撮影されたのであり、放火とは無関係と否定した。それらの写真についての冷静なコメントについては次の解説を参照されたい。Bangkok Pundit, “Photos from Bangkok, May 19: An update”, 9 Dec 2010, (<http://asiancorrespondent.com/43506/photos-from-may-19-an-update/>).
- (28) Mukhom Wongthet, “Chomna kradumphai thai”, *An*, 2(4): 73-74, 77-79, 81-82.
- (29) Phuangthong Phawakkhrapan, “Mua sunak fao ban waeng kat coakhong ban”, *An*, 2(4):154.
- (30) Thongchai, *An*, 2(4):49-50.
- (31) Krungthep Thurakit (online), 3 May 2010.
- (32) 2006年クーデタ後の2007年7月に公布施行されたコンピュータ犯罪法に基づいたウェブサイトへの規制については、UDDの活動が活発になった2009年以後に急増しており、しかも理由の77%は王室への不敬であった(表5、6参照)。

表5 URLの閉鎖件数、2007～2010年

年	裁判所決定件数	封鎖URL数
2007	2	2
2008	13	2,071
2009	64	28,705
2010	39	43,908
小計	117	74,686

出所: iLaw, “Situational Overview on the Control and Censorship of Online Media (2007-2010)”, <http://ilaw.or.th/node/632>, 9 Dec 2010.

表6 URLの閉鎖理由

項目	件数
不敬	57,330
ポルノ	16,740
中絶情報	357
賭博	246
その他	13

出所: op.cit.

- (33) 政府は2010年4月29日に王室打倒を企むネットワークがあると発表し、多数のUDD関係者の名前をあげていた。だが、その摘発が行われていないので、真相は不明である。UDD弾圧のための口実にすぎなかったのかもしれない。
- (34) “How hardline have the redshirts become?”, *New Mandala*, 18 Nov 2010, (<http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2010/11/18/how-hardline-have-the-redshirts-become/>).
- (35) “Prachatham(1)” .
- (36) 筆者は、アンチャリー・マニーロート氏が2010年10月にチェンマイで行った寺院住職、労働運動指導者、元警察官の実業家、農民3名の計6名へのインタビューの記録を読ませてもらった。Interview by Anchari Manirot. 政治活動が禁止される僧侶以外は、UDDの運動への熱心な参加者である。労働者によれば、工場仲間への不満をかき立てている理由は、第一に虐殺であり、続いてその真相が究明されず誰も責任を取らないことである。6名全員が、総選挙の実施を求めたにすぎない非武装のデモ隊を狙撃兵まで使って殺戮したことへの激しい怒りを共有していた。彼ら自身やその身近に首都の集会への参加者が少なからずおり、戦友の死と受け止めて怒っているのである。僧侶を訪ねてくる「将校に言わせると、王室は、存続を願うならば役割を見直す必要があり、変わらないなら存続の見込みがないので防衛に軍隊を使うべきではない。」「まったくその通りである。王室も僧侶も信奉によって存在する。人々が信仰せず積徳に訪れなくなれば、僧侶は存在できない。国王も同じである。信奉に依拠している。人々が尊敬しなくなれば、意味がなくなってしまう。」「王室は、誹られるのが嫌ならば、政治に関与すべきではない。王室は自らの役割を見直すべきである。政治に関与すれば、王室が崩壊する。」赤シャツへ

の取締りでは、「国王が一言仰れば、国王ではなくても側近が止めておけば、一件落着であった。その機会があったにもかかわらず、阻止がなされなかった。」僧侶によると、「ドイサケート山の裏手の村に行ってみると、住民は全員が赤シャツである。彼らはいろんなことが分かってしまったと言っている。[王室の] 写真を持ち出して燃やして捨ててしまった。正しく対処しないと、王室にとって危険なことになる。」6名のうち4名が、アピシット首相は王室の操り人形にすぎないと述べている。言い換えると、厳しい弾圧の黒幕が王室と信じているのである。筆者自身も2010年8月にコーンケーン、ウドンターニー、マハーサーラカム、ナコーンパノムの東北地方4県の都市部と農村部で多くの人びとの声を聞く機会があり、王室への憤懣を思い知らされた。

(37) “Prachatham(1)” .

(38) Nithi, “Kanmuang khong sua daeng” .

(39) 「クーデタを支持する金持ちや有力者は、戦車が首都の路上を走ったとき、喜びを隠そうともしなかった。・・・彼らはタイでは権力や富の配分が不均等であることを弱者に思い知らせてしまうことに気づけなかった。クーデタ後には、タイ人の間で政治権力に関する理解が根本的に食い違っていることが明らかになった。」「2001年以後、恵まれない人々は、投票箱を通じて、社会や政治の不公平への静かな異議申し立てに乗り出した。しかしながら、選挙の結果は、軍事クーデタか政治化した司法によって、無視されたのである。Pavin Chachavalpongpun, “Coup of 2006 Gives Rise to Radical Rural Intellectuals” , Bangkok Post (online), Sep 20, 2010.

(40) Nithi, “Kanmuang khong sua daeng” .

(41) Khom Chat Luk (online), 10 Dec 2010.

(42) その12月10日にはタムマサート大学で学術セミナーが開催され、王室の政治的役割をめぐって歴史、憲法、民主主義の観点から興味深い発表が行われた。その映像や音声については次のURL参照。<http://www.internetfreedom.us/thread-5316.html> (2010年12月12日参照)。また、講演録はプラチャータイで4回に分けて紹介された。“Raingan sewana:sathaban kasat-ratthathammanun-prachathipatai ton thi 1, 2, 3, 4”, Prachathai (<http://www.prachatai.com/journal/2010/12/32251,-/32265,-/32310,-/32325>), 11, 13, 15 and 17 Dec 2010.

